

抑留記

大阪府 岡崎 博 好

〔宣戦布告〕

『昭和十六（一九四一）年十二月八日、大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は本日未明、米英両国に対し宣戦を布告せり。』太平洋戦争はハワイ真珠湾（パールハーバー）への奇襲、マレー沖での英のプリンス・オブ・ウェルス及びレパルス両艦撃沈の大戦果をあげたが、十七年ミッドウエー海戦の大敗に続き、十八年にはガダルカナル撤退、アッツ、キスカ、硫黄島の玉砕と敗色濃くなり徴兵年齢が二十歳より十九歳に引き下げられる。

十九年八月徴兵検査、翌二十年三月十五日、朝鮮羅南師団五百五部隊入隊。最後の学徒出陣であった。一期の検閲後、独立工兵百三十一大隊に編成替え。幹部候補生出願、母校より資格証明入着、直ちに手続きとる。大隊は対ソ戦に備えた陣地構

築のため羅南北部の山岳地に展開、連日強行作業続行中。

八月九日未明、非常呼集あり、ソ連軍が中立条約を破り満州、朝鮮に侵攻開始した。

直ちに軍装を整え朝鮮東部国境へ移動し、ソ連軍迎撃体制をとる。それより先、幹候出願せるものの予備教育隊入隊の声なく、暗号兵の特訓のため四桁数字の計算や乱数表による暗号文解読の訓練中だった。関東軍はもとより朝鮮軍司令部もソ連の侵攻はなしとして南方戦線にその兵力の大半を移していた。

これに対しソ連はドイツの降伏によって極東への兵力の大移動を開始、シベリア鉄道は連日連夜、鉄道をきしませ満州侵攻を急いでいた。

〔闇夜の武装解除〕

八月十日も国境へ向け一路歩を進めつつあったが国境戦で傷ついた満身創痍の兵士が陸続として来る。ソ連軍の強攻が察せられる。大隊は茂山付近の山中で大休止。一夜軍装を解いて明日の戦闘

に備うべくまどろんでいた。深更に至り宿营地はずれで異様なざわめき。朝鮮語とロシア語が重なり押し殺したようなそれは次第に身近に迫る。と、突然「ダダダバリバリ…」とけたたましい機銃音に総員が跳び起きた。状況を察するにソ連の侵攻に呼応した反日分子が日本軍の宿营地を密告、ソ連軍が奇襲をかけて来たらしい。やがてアメリカ製の大型トラックが一個中隊ほどの兵隊を乗せて到着、完全に我が軍を包囲した。

寝耳に水のたとえ通りの状況。「ダワイ、ダワイ」のロシア語も理解できず茫然自失、全員がホールドアップ。マンドリン（自動小銃）を胸元につきつけられた恐怖は西部劇ではおなじみの風景だが、この時ばかりは両手を肩まで上げるのがやっと、立ちすくむばかり。銃、剣はもとより腕時計から万年筆と彼らにとって物珍しい品物はことごとく戦利品としてカッパライの対象となった。

武装解除とは敗者が勝者に対し武器弾薬等戦闘能力のすべてを差し出し戦意なきを示す行為であ

る。つまり丸裸になることだ。我が大隊は八月十五日の戦争終結の日を待たず、この夜、戦わずして敗れ去ったのだった。

〔古茂山捕虜収容所〕

豆満江の支流であろうか、その河原は古茂山という寒村にあった。八月十五日を期して敗残の日本兵が大挙して集結し、収容施設が急造された。五メートル×十メートルほどの長方形に掘り下げた河原に石を積み上げた、古代の堅穴住居まがいの穴ぐらに三十人ほどが居住した。

「生きて虜囚の辱めを受けず」などとうたった戦陣訓などは一顧だにされず、生きている幸せを満喫する兵士は真夏の太陽のもと、河原で水浴を楽しみ、洗濯したり、あたかもピクニックに遊ぶ童子のようだ。中でも特異な集団があった。配給されるパン、たばこ等を買集め、より高値で売って歩くのは決まって大阪人である。商人の街「大阪」の面目躍如といふべきか、悲しくもたくましい商魂を垣間見る思いだった。

〔清津港船積み作業〕

二十年も冬が近づくと、さすがに堅穴住居では人間の命を維持することは無理となり、清津へ南下する。ここは北部朝鮮での唯一の不凍港であり五千トン級の大型船も接岸可能な港湾施設を持つ天然の良港。かつては北隣の羅津港と共に満州の農産物、鉱産山物を日本本土の新潟、舞鶴に輸送する使命を持った要衝であった。茂山の鉄鉱石は豆満江沿岸の石炭電力と共に製鉄製鋼を初め重化学工業、窒素肥料工業の大工場が林立する工業都市だった。

宣戦布告からわずか一週間で全満州はおろか朝鮮北部にある日本の大工場をことごとく奪い取り本国へ持ち去ったスターリンの悪行振りは歴史に残る特筆すべき汚点であろう。解体された大小さまざまな機械設備を船積みあるいは鉄道輸送した使役はすべて我等俘虜の労力によったものであり、ソ連経済の再建復興に天文学的な貢献を果たしているのである。しかるにその対価、その功績に對

して、幾ばくの補償を支払ったであろうか。正にそれは火事場の盗人も舌を巻く行為ではなからうか。

北部朝鮮は多雨多雪の気候で有名である。殊に清津港の冬は氷点下一〇度も珍しくはなく、これに風が伴うと堪え難き苛酷な労働環境となる。「ビストリー・ダワイ」を連発する長いコートを着たソ連将校は指揮棒を振り振り「ア・エータ」「ア・エータ」(これとこれと)などと声を張り上げて船積み作業を強要する。昼夜兼行の船積みだが、真夜中ともなれば、突っ立っているだけの警備兵もさすがに寒さに耐えきれず、俘虜を誘っては焚き火を囲むのだ。隣に座ったソ連兵はまだ初々しさの残る兵隊だった。欧州戦線ではドイツ軍をやっつけたのだと、手振り身振りで語る姿はいかにも誇らしげだった。

そして「お前はいくつだ」「おれと同じだ」などと、勝者も敗者もない若者同士の打ち解けた一夜もある。「ウオトカ・リットル・マグー」(ウオツ燦たる帝国陸軍の行軍ではなかった。尾羽打ち枯らした敗残兵の行列でしかない。

清津港で語っていた少年兵とは違い、今度の警備兵は見るからに悪相の人種に見える。独ソ戦では刑務所を解放して囚人を戦線に駆り出したという。少し列を遅れるとマンドリンの銃先で突きまくる乱暴さである。今や俘虜の惨めさをかみしめる余裕はなくなっている。早く日本に帰りたいの一念で腫れ上がった足をひきずって歩く。と突然、隊列の中から歌声があがる。なつかしい歌である。

うさぎ追いかの山

小ぶな釣りしかの川

夢は今もめぐりて

忘れがたきふるさと

兵隊の士気を鼓舞しようと考えた者が語らって唄い始めたようだ。すると例の囚人兵が「ダダダ……」と発射した。しゃべるな、声を出すな、という警告であった。彼らも無数の日本兵を統御して無事目的地まで送り届ける任務を持っており、

カを一リットル飲めるか)などと自慢することも。忘れずにつけ加える言葉は「ダモイ」(帰国)だった。

〔ダモイ・その一〕 二十一年

「清津港での作業が終ると、お前達は東京ダモイだ」気心の知れた警備兵は喜ばすように言い続けているのだが、貨車に積まれて走り出した方角は、「北」だった。帰国なら清津からでも乗船できるではないかという者、いや俘虜規定によるとソ連領から帰還させるのだという者、悲観論から楽観論まで侃々諤々の論争のうちに列車は古茂山、会寧を過ぎ囚徒們に着く。豆満江を渡れば帰国は絶望的。なんと列車は豆満江沿いに南下。琿春に近い見覚えのある風景が展開するうちに列車は止まった。やがて「全員下車」の号令である。

隊列を取り囲むようにマンドリンの警備兵が罵声を浴びせる「ダワイ・ビストラ」(早くしゃがれ)。これから歩いてソ連領に入るといふ。羊の群れが追い立てられるようなみすばらしい一群は、あの

血気盛んな日本兵の反乱、暴動を極度に警戒しているのだ。隊列の中から突如として歌声が起きては奴らも胆を冷やしたに違いない。

シベリアの地に足を踏み入れて早や何時間か経っていた。シベリアは凍土、不毛、密林というのがかつてのイメージだったが、旅装を解いた所は茫漠として見渡す草原が、かすかな凸凹を繰り返しながらどこまでも広がっていく大平原だった。その平原の中に忽然と姿を見せたラーゲルは四隅に望楼を設けた周囲千メートルほどの広大な構えである。鉄条網が三メートルの間隔をあけて二重に張りめぐらされている。これでは逃亡を企てようと、鉄条網を突破する前に望楼からの一斉射撃で即死は免れない。仮に鉄条網を抜けたとしても、身を隠す木陰一つない一面の平原では、まず脱走は不可能である。帝政ロシア時代の監獄の跡というから推して知るべしである。当時の内部はすべて撤去され、日本兵捕虜用に、だだっ広い獄舎内を幾つかに区分けしただけの寒々とした空間に二

段にした寝台が並べられている。五百人は収容可能だろう。

〔大平原に舗装道路造成〕

北極までも続いているのではと思われる地平線を望みながら、大平原にアスファルト敷きの近代？的舗装道路を造るといふ。収容された翌日にはこの道路工事に駆り出された。二十メートルの幅をとった道の両側に一・五メートルほどの兵隊が立てる深さの側溝を掘っていく。五十人ほどの兵隊が一行になってツルハシを振る光景は正に壯観である。道路となる中央帯には小さきままな土石が運び込まれ、日本軍から掠奪したローラーで固めていく。次にベトン（アスファルトの粗製品）を流し込んだ上にさらに砂礫を敷き詰める。もうもうと煙が立つ道中に並んでならしていくのだが、シベリアとはいえ既に夏に近い季節の炎天下の作業は極熱地獄そのもの。

早朝にたたき起こされ黒パン一片と塩分だけのスープという食料で西日が地平線に消える薄暮ま

で間断なく続けられる。掌の豆はつぶれて血がふき出す。足は丸太のごとく腫れ上がる。戦争に敗れること、俘虜の辱めなど、この重労働に比すれば物の数ではない。ラーゲルに引き揚げても口をきく者はいない。黒パンのかけらに例の塩辛いだけのスープをすすり、二段に分かれた寝台にばったり倒れたまま寝込んでしまう。こんな日常が三カ月も続いたのだろうか。突然の移動命令である。

〔ダモイ・その二〕 コルホーズ（集団農場）

ソ連特有の農業協同組合方式による営農システムであり、耕地や農機具など大部分を共同化したそれは「能力に応じて働き、必要に応じて与えられる」という共産主義社会の根幹であるという。そんな思想には興味はなかったが、大地を相手に思い切り手足を伸ばす労働はこれまで味わったことのない解放感に浸ることができた。カルトーシカ（じゃがいも）は寒冷地のものが美味と聞いていたが、うわさにたがわず実にうまい。北海道産のイモが連想された。

ロシアの大地は広い。山も丘も見えない。見渡す限り農地の展開である。我々の仕事は掘り出されたイモを一輪車で倉庫に運び入れる。慣れない一輪車に悪戦苦闘、何度ひっくり返したことか。その度にロシアの女性群の笑いの種になる。「ヤポンスキーがまたやった」などと手を叩いての哄笑であるが、それは決して悪意をこめたものではなかった。とにかくロシアの女は朗らかでよく働く。そしてよく食う連中は肥満である。

北国の夕暮れは遅い。一日の作業が終わるとナ

チャーリク（監督）らしき男が大きな箱をかかえて我々を招いている。「ダワイ・ウオツキ」。聞いてはいたが「めくら蛇におじず」のたとえで、出されたコップを一気にあおった。胸に火がつきガツンと頭をなぐられたようにその場にひっくり返ったのを覚えている。

戦争は国と国とのケンカである。庶民の日常はなんと平和なことか、なんと楽しいことか。和気あいあい、笑いの中で静かに暮らしていった。

昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありなむ

この命なにをあくせく

明日をのみ思ひわづらふ

(藤村詩)

〔ダモイ・その三〕 二十二年

ソ連の俘虜に対する感覚は実に幼稚というか、子供だましというか、見えすいた嘘をまことしやかに言う。その最たるものが「ダモイ」の三字だ。俘虜は、今年こそ、いや来月には：と帰国を一日千秋の思いで暮らしているのだ。そんな飢えにもまさる心情をおおるかのごとき甘言で人心を掌握しようとするのだ。

そのレンガ工場は小高い丘の上にあった。

木型の中に練った泥をつめて「土レンガ」を作るのである。丘の上からはるか下のレンガ干し場まで線路が設けられている。トロッコに土レンガの箱を載せて坂落とさせろのだ。中には脱線転覆して折角の土レンガがおしゃかになることも。難関は干し場から上の粘土場までトロッコを引き

揚げる作業である。トロッコに群がるごとく左右三人ずつ計六人でロープを肩にえんやこらと運び上げるのが一苦勞。作業の実体は噴飯に近い超原始的工程だ。戦争前から続いているレンガ工場と聞いて唾然としたものだ。

〔文盲率九〇パーセント〕

ロシアといえば「戦争と平和」「イワンの馬鹿」のトルストイ、「桜の園」「三人姉妹」などのチェホフと、私どもにも馴染みの文豪は枚挙にいとまないほど高度な知性ある民族と置いていたが、兵隊はいうに及ばず将校といえども教養ある人間は稀である。たとえば作業に出る時は営門の前で人数調べの点呼がある。何人出て何人帰ったか、収容人員の確認をするのだが、日本人の常識では掛け算九九で簡単に計算できるはずなのに、彼らは足し算さえ満足にできない。一、二、三、四とすべてプラス一で数えていく。従って五十人の確認に二十分も掛かる非効率さである。

一九一七年の革命でソビエト連邦ができて教育

制度が大改変されてから文盲率、つまり教育を受けない者が急増した結果だという。街中で作業することもあったが、帝政ロシアの昔日を知る古老は「ツアー・ハラショー」（皇帝時代がよかった）と口をおおって小声で語る姿は少なくなかった。

〔民主運動と壁新聞〕

「郷に入らば郷に従え」という。生まれて二十年、かちかちに教育された軍国青年が、戦争に敗けたんだ、はい思考を変えなさいと言われても、染み込んだ大和魂は容易に氷解できるものだろう。各ラীগレルには時流に乗ってかソ連側の要請か「民主運動」「壁新聞」など共産主義宣伝とラীগレル運営の民主化を呼びかけるグループが出来ていった。冒頭の諺のごとく、いちはやくこれに乗ってソ連邦万歳を唱えて勝者に迎合しオルグと称する輩が闊歩するようになる。マルクス、レーニンを説き思想改造の論文を貼りめぐらす一方、アメリカ占領下の日本内地の無秩序な世相を非難し、困窮をきわめる食糧事情などを書きたてて反米、

反日のプロバガンダの集会在連夜開かれていた。例によってソ同盟礼賛のオルグの講義が一段落し討論の時間となる。

集会の初めから私を注視していたオルグは果たせるかな「日和見主義」についての見解を求めて来た。私は共産主義もソ連邦も今、勉強中であること、従って何も発言の用意がないことを述べると共に「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿主義なる私考をも語ってみた。以前のラীগレルではまだ民主運動などなかったためか、私考に賛同する拍手さえ起こったほどだったが、この集会では全員が顔を伏せて賛意を表する者は一人もなかった。当然の話である。オルグの意に沿わぬ発言は直ちにソ連側に密告され、その結果は苛酷な職場に配転されるのは火を見るより明らかであるからだ。自殺行為の何ものでもない。私の主張はむしろ日和見主義を批判し右顧左弁するなど訴えたものだったが、三猿主義を理解できないオルグは私を反動分子とのしる始末。やがて政治部将校に呼

び出され移動を命じられる羽目となる。「長い物は巻かれよ——これこそ生き抜くため、生きて日本に帰るための鉄則と悟るのだった。

「名誉を奪うことは出来ぬ。

出来るのはそれを失うことである」

(チェホフ)

〔建設ラッシュユ 二十二年冬〕

アムール河をはるかに望むラーゲルではビルディングの工事が盛んに行われていた。基礎工事はなぜか夏を避けて冬季に行うことがほとんどだ。夏は少し掘るだけで湧水がひどく深層工事が不能。冬は凍土だからかなり深い所まで掘れるという。もちろん、日本でいう潜函工法などという高度な技術など無縁の国。すべて捕虜の人力に頼るのみ。零下四〇度という永久凍土を掘れというのだから容易ではない。一日一平方メートル二十センチ掘るのが精いっぱい。それでは「ノルマ・ニマグー」(労働基準量不足)という。三十センチ掘れと責めたてるが、当の監督自身それは不可能であるこ

と先刻承知での注文なのだ。以心伝心、人間なら自ら分かるものだ。

シベリアでの基礎工法を紹介しよう。基礎深度を目標まで掘り下げると、小さきまぎまの土石塊を「ゴロゴロドードー」と全く無造作に流し込む。

次にトラックで運んで来たバラのセメントをスコップで流し込む。もちろん、作業は抑留者である(セメントは日本のように袋に入ったものではない。すべてバラ)。粉のセメントだから一面もうもうたる煙だ。作業の兵は、手拭で頬かぶりしているが、全身セメントの塊になっている。これに水をかければ塑像が出来るだろう。傍らの監督が笑いながらつぶやく「早く春が来ないかなあ」。春になると地下水が上昇して石と砂とセメントが混ざり合って立派な土台が出来るというのだ。地震のない国というからこんな工事も可能なだろう。面白い体験だった。

〔クーシャチ・ネット・ラポート・ネット〕

空腹と酷寒で労働意欲がわくわけがあるのか。

どうにでもなれと、鉄棒を抱いて突っ立っていると先刻から私の周りをうろついていた現場視察のカピタン(大尉)が突然大声でどなりだした。かねてから「ドアメートル」と仇名された大男が私の面前に立ちふさがり更に声を張り上げる。「ポチョム・ラポート・ニエト」(どうして働かないのだ)。

「クーシャチ・ニエト・ラポート・ニマグー」

(食べてないので働けない)

捕虜の分際で大尉殿に反論するとは正に命を張った抗議だ。これを見ていた同僚たちは作業を放り出して大男と小男の二人を取り囲み青くなつて全員ふるえている。大尉は腰の拳銃を抜き、引き金に指をふれんばかりの形相。早口で「お前は銃殺だ!」とでも言っているのか。三年もシベリアで辛抱したが、もう日本に帰れる望みなどどつくに無くしていたのか若者はどなり返す。「射つなら射て、殺すなら殺せ。俺が殺されたら、お前も日本兵になぐり殺されるだろう。お前一人だ。お前を

殺して深い穴の底に放り込んでやる。どうだ、それでも射つか、さあ殺しやがれ」。同僚はこの危急の展開に目を見張り足をふるわせているばかり。

さすがの大男も異様な雰囲気胆を冷やしたのか「覚えていろ」とかなんとか、ロシア語の捨てぜりふを後にして穴ぐらを上がって行った。私は泥んこの水たまりに座り込んだまま、しばらく立ち上がれなかった。

〔懲罰の伐採で山中へ〕 二十三年冬

定期的にラーゲルを移動するのはソ連側の労働力の再配分などで珍しいことではないが、時には政治部と民主クラブの思惑が介在する移動もある。建設工事現場でのカピタンとの確執や三猿論争にまつわる民主運動オルグとの不協和音も移動の因とならないこともない。

政治部将校が通訳を連れてラーゲルにやって来たのはそれから数日後の夕刻だった。直ちに移動させるから持ち物を整えて営門の前に出て来いという。面白いことに営門に出ると既にトラックが

止まっており三人の兵隊が乗っている。こいつらもやられたのかと思うといささか気が楽になった。トラックは野越え山越えして走り続け、山中のラーゲルに着いたのは真夜中だった。深山幽谷の化け物でも出そうな雰囲気の構えをくぐり四人は別々の班に編入された。班長という軍曹くずれのような態度の大きい男が出て来て明日からの作業の説明を始めた。「二人一組で両挽きの大鋸で伐採に行く。直径五十センチ以上、周囲一メートル以上の立木を切り、二メートルの長さに揃えてトラック一台分にする。これがノルマだ」。

学生時代、軍事教練で扱った小銃ぐらいしか持ったことのない、ペンと紙の日常から一転、キコリになれと言われても、見るもの、使うもの全て生れて初めての経験だ。

山に入る前に、雑然と山になった大鋸から好みのものを選ぶのだが、どれが切れるのか、どんな鋸が扱い易いのか知る由もない。ペアになった相手も学卒の若者でこの方の知識など皆無という。

ない。急いで帰らねば脱走と間違えられ、チョルマー（牢屋）にもなりかねない。こんな作業の日常が続いたが既に体力の限界を感じた。

〔南京虫・ノミ・シラミ〕

かつては囚人の収容所だったというボロボロの牛小屋そのものの建物は二段に仕切られ、上段の天井からは月がのぞいている。伐採作業もさることながら人の血を吸う虫には閉口した。夜も更け寝息がたち始めると砂をころがすような音をたててはい出してくるのが南京虫。「それ……」とばかり用意の灯油の明かりをつけると何と鈴なりの行列。ピチピチつぶすより早く潮がひくように姿を消す。刺されると必ず二つの痕跡を残すのも南京虫の所在証明である。

夏の間は、これにこりて、ラーゲルの鉄条網に沿った草原で寝ることにした。警備兵も事情をくんで大目に見てくれたのは有り難かった。「白い身」というのがシラミである。着衣の縫い目にびっしり住みつくこの虫は発疹チフスを媒介するとい

古参の者や大工の経験者はひと目見てその切れ味が分かるらしい。早々とめざす鋸を取って営門を出て行く。残った鋸にろくなものはない。警備兵に追い立てられながら知らぬ山道を歩くが、古株に足を取られ、苔に滑ったり。適当な小さくて大きな木を定めて先ず斧で鋸の切れ目を入れ、右と左に別れて大鋸を引き合うのだが容易に鋸は動かない。当方を素人と見たのか鋸の方から動くのを拒んでいるようだ。「倒すぞー」の合図で振り向くと一抱えもある大木が辺りの木を押し倒し蹴散らしつつ轟音をたてて倒れる。あれだけの大木ならトラック一杯分はあろうか、そのペアは昼前にノルマを果たし帰営していた。こちらはまだ一本も倒していない。昼近くに細いやつをやつと一本。黒パンと鯀の塩スープで昼食をとり、休む間もなく二本目。三本目を倒した時は上弦の月が雲の中を泳いでいた。シベリアの十月は冬である。腹は減る。腕は疼く。腰は鳴る。倒木で打った後頭部に手をやると血が出ている。同僚の姿はどこにも

うから恐ろしい。蚤もペストが心配だが、その跳躍力は抜群で捕らえ難い。それほど、俘虜の生活環境は人間が生存できるようなものではない劣悪さである。

生活に欠かせないトイレの話も逃すことは出来ぬ。横三メートル、縦五メートル、深さ二メートルという大きな穴を掘り、十本ほどの丸太棒を渡して足場にした大便所。三十人ほどが一斉に並んで用を足す光景は音といい香りといい圧巻というほかない。冬になると次々と積みあがった形は逆ツララのごとき壮観を呈し、ついには股間に届くに至る。やむなく長い鉄棒で突き崩していく。何とも、言語に絶するラーゲルの糞尿譚の一席である。

〔発疹チフスで入院〕 二十四年

早朝、無性にどの渴きを覚える。起こしてくれた隣の兵隊が私をのぞきこんで「どうした!! オカザキー」と叫んだ。四〇度近い熱で頭にさわれぬほどという。全身に発疹だ。間違いない発疹チ

フスだ。ソ連側に報告され、直ちに入院となった。高熱でうなりながらトラックの振動は脳髓を突き刺すようだ。ゴスピタルに着いたのは昼過ぎだった。三十人ほどの日本兵がベッドでうなっていた。何日がたったのか、ある朝、セストラー（看護婦）に起こされた時には熱も下がり発疹も消えていた。型通りの診察の後「ラポート・ニماغー」（労働不適格者）と認定された。体重三十五キロの骨と皮の体を見れば分かるように、労働に堪える体力は持っていないかった。

〔ナホトカへ〕 二十四年

病み上がりの退院兵はハバロフスクの収容所に送られ、ダモイのための最終検査を受けた。真っ裸でセストラーの前に立たされる。彼女は股間を見つめていたが「ヤポンスキー・マーレンキー（日本人は小さい）」「ルスキー・ポリシヨイ」（ロシア人は大きい）と高笑いするのである。屈辱感に堪えつつ「馬鹿め!!」と心の中で叫んでいた。

翌日、早朝、わずかの黒パンと塩スープを渡さ

響きわたると、船倉からかけ上がった帰還兵がデツキに鈴なりになって叫んだ。

「万歳！ 万歳！ 万歳！」

緑したたる峯々に、赤松林つらなる浜辺に、歓喜のどよめきがこだました。

昭和二十四年十月四日、舞鶴港上陸。四年二カ月の悲惨きわまりなき日夜に耐えしのび、今ぞ故国の土を踏む、人生の感激これに過ぎたるはなし。ただいま、帰って参りました。

〔終わりに〕

昭和十六年四月に結ばれた日ソ中立条約はスターリンの策謀にまんまとかかった政府、大本営の大失策であった。二十年五月、ドイツが無条件降伏するや欧州戦線の全軍を昼夜兼行シベリア鉄道をきしませて満州侵攻へ転進させたスターリンの狡猾さを見れば、ソ連国家の欺瞞性が浮き彫りになる。日露の大戦後、ソ連は対日報復を念頭に、昭和十三年七月の張鼓峰事件、翌十四年五月のノモンハン事変と挑発をことにしたあげく、二十年

れ、一路ナホトカ行き貨車に積み込まれた。貨車は走っては止まり止っては走り。一度止まると二時間は動かない。その間線路脇の草むらに一列になって用を足す。もちろん、警備兵の監視つきである。体力温存のため、貨車の中で静かに横たわり古里への思いにしたる者。ナホトカに着いたのはハバロフスクを出て二日後だった。帰還者のテントが幾十となく張られている。調査票に署名を終えると例の民主クラブの連中の聞き飽きた「講義」があったり、せわしく時間が過ぎる。岸壁には「日の丸」をつけた大型船が待っている。

翌日、朝から乗船開始だ。タラップにかけた足が震えた。汽笛一声。これで間違いなく日本へ帰れるのだ。苦しかった、みじめだった、シベリアよ、ソ連よ、あばよ。舷側に並んだ帰還者は声もなく、ただ涙にくれていた。

〔国破れて山河在り 城春にして草木深し〕

帰還船「第一大拓丸」は順調に航海を続けて一夜やがて日本近しを知らせる長い汽笛が尾を引いて

八月八日の対日宣戦布告によってわずか六日間の無血占領で、在満在鮮の工場生産設備機械の大半を持ち去った。国家間の条約が反故になることは外交史上、枚挙にいとまないほどだが、満州侵攻のための中立条約破棄だけは絶対に許されるものではない。加えて在満六十万の兵士を拉致し十年余に及ぶ重労働に酷使し、荒廃した国土の再建に資したのは「万国俘虜条約」違背の最たるものである。

抑留中、両三度のラーゲルの移動に際しても必ず口にするのは「ダモイ・トーキョー」だった。

日本人の甘さを巧みに利用した宣撫工作だが、警備上の作戦にしても、民族のだましの本性が如実に看取されてならない。時にはナホトカに着き帰還船の煙突の煙に帰心をつのらせつつ、再び奥地への逆送を余儀なくされたあの口惜し涙を忘れることはない。その陰に民主運動と称する集団の策謀がなかったか否か。大半の兵は日本へ帰るためだけに面従腹背の参加を強いられていたのではな

かったか。今日のロシアの国家体制を見るにつけ、共産主義と民主運動、そしてシベリアでのあの嵐のような労働歌の高揚は不思議な夢の世界を想起しているようである。

今なお凍土に無念の情を抱いて眠る幾万の戦友に思いをいたし、灯をともし、香をたき、慰霊の誠を捧げます。合掌

ソ連へ

昭和二十一年四月清津より北朝鮮ソ連国境へ琿春付近からソ連領へ昼夜兼行で徒歩にて、倒れる者続出、大平原のラーゲルへ(地名不詳)

昭和二十二年四月ウオロシロフ近辺のラーゲルにて道路工事、建設工事、コルホーズ等転々

昭和二十三年四月懲罰移動にて伐採へ

昭和二十四年五月発疹チフスで入院

昭和二十四年九月ナホトカへ

昭和二十四年四月十日舞鶴上陸

復員

昭和二十五年町役場臨時嘱託 農協職員

員

昭和二十七年三月読売新聞大阪本社入社 編集局校閲部勤務

昭和五十五年右定年退職 嘱託勤務

昭和六十二年右退職現在に至る

(大阪府 杉山 森一郎)

【執筆者の紹介】

本籍 広島県沼隈郡横島村(現・福山市)

出生 大正十四年八月一日(本籍地にて)

学歴 昭和十三年四月大連商業学校入学(一年休学)

年休学)

昭和十九年十一月繰上卒業

入隊 昭和二十年三月羅南五百五部隊に入隊

終戦 昭和二十年八月十五日古茂山俘虜収容所に集結、十月から清津港にて、ソ連

が捕獲せる工場の設備機械等をウラジオストックへの船積み作業

復員